

# 第四章 中世

## 第一節 奄美の世 (アマムン世)

### 一 奄美の世 (奄美群島の概況) 支庁編より

奄美や沖縄では、世のはじまりの時代を「くばの葉世」あるいは「アマムン世」と呼んでいる。

奄美群島の奄美あまみという呼称は、南島の祖先神といわれる「アマミコ」から出ている。「奄美」という表記は、続日本紀ではじめて用いられたが、文献に「アマミ」という地名が最初に見えるのは、日本書紀六百五十七年の項の「海見」という表記からである。この表記からもうかがえるように「アマミ」という地名は、もともとこの地方の住民の海洋民族的な性格に由来したものである。

奄美群島は日本でもっとも濃厚に海神信仰の残っている地方である。他の地方では稲作儀礼が祭りの中心であ

るが奄美では、海神送迎祭の方が最大の祭礼である。そのとき唱えるオモリ(神歌)に「ユエムン」といい、豊漁など、海の寄り物(ユリムン)のにぎわいを祈願する神歌がある。海の幸さちに依存することの多かった古代人が生んだ美しい祈りの詩である。この、海のユリムンに由来する地名は、さんご礁にとりまかれたこの島々に点々として指摘できる。漢字による表記は異なるが、方言名ではみんな「ユン」である。黒潮にのって北上してくる海のユリムン、海の幸のアニマ(精霊)を手招き呼んだであろう古代人の、その豊漁儀礼、海神祭礼とかかわりのある地名にちがいない。そしてこの列島はまた「ヲナリ(姉妹) 神信仰」の地でもある。ここでは女性に、神と感応するすぐれた能力と強い呪力を認め、祭司権は女性の手に握られていた。

古代奄美人の精神に深い影響をもったこのふたつの信仰、つまり海神を主神の座におき、強い祖先崇拜とも結びついたアニミズム(精霊信仰)と、「ヲナリ(姉妹) 神信仰」という形でのシャーマニズム(巫俗)は奄美の村落の構造や社会の形成と展開に深く影をおとしているようである。

奄美古代の集落はマキヨといった。本土におけるマキヨと同じく、同族団的な血縁社会であった。マキヨの中心の家は、部落共同体の祖家と見なされるウフヤあるいはフーヤ(大屋または大親)である。この家の男子(エヘリ)は村の行政をつかさどり、やがてヒヤーに成長していく。ヒヤーはウフヤーの転じたことばで、ふつう「百」の字をあて、共同体の族長的な首長のことである。

一方ウフヤーの家の娘、つまりヲナリ(姉妹)の一人は集落の祭りをつかさどって、自分のエヘリ(兄弟)の行政権をバックアップする。これが南島特有のノロ(祝女)制度の母体となる。

奄美の古代村落の構造には欠くことのできない四つの基本的な道具だてがあった。第一はモリ、オデ(御嶽)、ウガン(拝山)、オボツ山、カグラ山など部落によって呼び名の違う「聖なる林」である。オボツカグラ(天の神座)から神が天下る神聖な場所である。第二は、これも所によりキユツキヨ(清い川)、カンギョ(神の川)、ミゾリ(身そぎ、あるいは水ごりの転訛)、ヤンゴ(屋ん川)などと、呼称を異にする「清めの泉」である。祭事に参加する神女たちが身を清める霊泉である。第三は

部落の中をつらぬく「神ん道」である。その上端は聖林に発し、他の端は海辺にでて、海の彼方のネリヤ(根の国、竜宮)に通じることになっている。部落を訪れる海神や天上神(発生的には海神の転訛)を神女たちが送迎する神聖な通路である。第四の道具だては「祭りの庭」である。これには海の神の浜ウドン(御殿)のあるウドン浜、部落の中にあるミヤーという広場があり、トネヤやアシヤゲという聖屋もこれにつく。部落が聖林の麓の「里さと」から、時代とともに海岸の方の「金久かねく」に発展するにつれて、また後に琉球王朝やさつま藩の支配者たちの行政的な配慮が加わって、もっとも変化をうけた道具だてである。

さて、奄美史の時代区分を、島ふうになぞらうと、まづ原始から八・九世紀頃までを「奄美世アムン」という。階級社会以前の部落共同体「マキヨ」時代である。長いこの時代の流れのなかで、奄美の農業は、水田での水芋(水中に生える里芋)、焼畑での粟や里芋、やがて赤米、真米と展開していったものと思われる。

しかし、縄文時代以来の漁獵採取への依存が大きな比重をしめて、長く歴史時代まで残存していたらうことは

疑えない。

文献によつて察するに、七世紀からはじまった大和朝廷の南島経営は、八世紀前半に遣唐使船が奄美を通つた南島路時代がピークで、七五九年以後この航路が、利用されなくなると後退し、八二四年のタネ国廃止以後は全く放置されたようである。いわゆる「奄美世」を考古学的に見ると、本土の縄文後期や弥生後期の文化圏内にあつたことは、現在の乏しい資料でも明らかである。それに続く須恵器の時代になると、この土器は沖縄より奄美の方にはるかに多く出土し、南九州とはちがつた南島独自の須恵器であるという。考古学的な調べがもつと進めば、太宰府の南島経営放棄に応じて深化していった奄美の独自性を、須恵器編年の上でもたどることができると期待される。書紀によると、当時この地方の産物で中央の注目を引いたものは、染料としてのクチナシ、むしろを織るイ草と「種々の海産物」である。

この「奄美世」につづいて「按司」という首長たちの支配割拠する階級社会にさしかかるが、これを「按司世」と称している。これにつづく琉球王朝時代が「那覇世」であり、藩政時代を「大和世」とよびならしている。

## 二 按司の世

鉄文化移入のおくれが条件となつて、奄美における階級社会の登場は、本土より七〇八百年ほどおくれたようである。つまり八〇九世紀ころには、奄美は按司という首長たちの支配割拠する階級社会段階にさしかかつていたものと思われる。

首長のことを、書紀には「阿芸」、風土記には「阿旨」と記してあるが、南島の「按司」もそれと同類の語である。

按司とは、土地や人民を支配する階級社会の首長のことと言われ、あるじ(主)からの転とも、あぎ(君)から出たとも言われるが定説はない。

按司の字を当ててあるが、「あぢ」が本来の呼称で「あんじ」とも言っていた。「あんじ」は例外なく「あんじ」で、「あんぢ」ではない。「おもろさうし」にも「あんじやあぢとなよら」などという用例があるように、二音のときは「あぢ」、三音のときは例外なく「あんじ」と書かれ、話し言葉や組踊りの白詞などは、すべて二音の「あ

ぢ」に限られ「あんじ」と言うことはない。

「按司の又の按司」とも「大世之主」とも形容され、大按司をティダ(太陽)または「世之主」と言い、王も「世之主」と言つて領主のことである。

琉球の位階では、王子の次が按司、その下に親方、親雲上と続いている。

ここで按司の発生とその生成転化について、沖縄史を参照しながら考えてみよう。

「球陽」によると、国初の琉球の分野および開闢の項の始めなり、二男は按司の始めとなる(按司は即ち中朝の諸侯の類の如し)、三男は百姓の始となる。長女は君君の始となる。(君は婦女の神職を掌る者の称なり、君君は貴族の婦女数十人をして各神職を掌らしむ故に之を合称して君君という、康熙の初め儀して其数を減ず而して今数職の存するあり)次女は祝祝の始めとなる。而して倫道始まる。始めて國を分ちて三区となし、且城都を建て画野分郡して以て按司を置く。」とあるが、「中山世鑑」や「中山世譜」にもほぼ同様のことが述べられている。これは神話伝説を歴史現象としてとらえようとした

ための記述である。

沖縄・奄美の歴史は、次のような時代区分でとらえることができる。

- 一 原始時代(漁獵時代……三、四世紀まで)
- 二 古代社会(農業部落時代……三、四世紀から十二世紀末)
- 三 封建社会前期(按司時代、三山対立時代……十二世紀から十五世紀)
- 四 封建社会後期(第一尚王国、第二尚王国……十五世紀から十九世紀)
- 五 近代社会(十九世紀から現代)

これにそつて一べつしてみると、原始時代は別として、部落時代の中心は根所(根家)で、根所の娘が神女として祭祀をつかさどり、その兄は大哥と呼ばれ、マキヨ(クダ、フダ血族団体の部落)のころ(男)などの先頭に立った。神女と大ころは妹兄(ヲナリ、エケリ)で根神、根人と呼ばれた。

このころは大陸との交通がまだなかったため、金属使用がおくれ、一二〜一三世紀ころまで石器を使用していたのではないかと思われる。そのために米作時代に入っ

ても、そのころまで停滞的、封鎖的な部落生活が続いていたのではないかと言われる。このような古代的部落共同体の社会が一二、三世紀まで続いたとみられる。

鉄器が全面的に石器に入れ代わりあらゆる用具の革命が行われたのは、一三世紀から一四世紀にかけてであろう。金属農具の使用とともに耕地は低湿地にまで拡大され、新しい村ができる。新村はもはやマキヨ（血族団体の部落）ではなく、地縁団体である。そうなると生産は増大し、人口は増え、革命は生産機構にとどまらず、物の交換、流通の範囲も拡大する。

これらの変革を推進した新しい指導者、支配者が各地に現れる。これがアヂと呼ばれる武力者たちである。アヂは按司を当てて、アンジとも言われた。しかし、アヂをアジと表記した例は一つもない。ヂとジの発音が明瞭に区別されていた証である。

按司は、いちはやく鉄器に着目し、これを獲得した人々とみられ、最初は武器として、さらに農具、工具としてこれを入力した。これにより産業的、社会的変革を促進し、その変革を通じて政治的権力をにぎり、各地方における人民の支配者にのしあがった。

一四世紀の初めまでに、沖縄本島を中心に北は奄美大島から南は宮古・八重山まで、按司たちの支配に入った。北山・中山・南山の三天按司の対立があったのも、このころである。

彼らは石囲いの城郭を築き、支配下の住民から租税を取り立てた。百内外の城跡が残っているから、今の一村に平均二人の按司がいたことになるが、時の経過につれ盛衰興亡しつつ結合へと進んだ。

前時代の部落の長は、掟（対語は物言い）という根人が掟になった者が多く、按司の支配機構の末端をつとめたとみられる。「掟持ち」という言葉があり、納税の事実をうたった「おもる」も散見する。根人は神事に関しては依然として根人であるが、根人でない掟は行政の末端にすぎず、神事には関与しない。

第一尚氏の時代、中央政府ができて各按司は地方に居住し、直接人民を支配していたので地方では度々反乱が起こった。按司たちは人民から租税を徴収するが、彼ら自身もまた下人を使つて農業を営む土豪であった。

第二尚氏の時、按司たちを首里に引き揚げさせ、中央集権制度に改めた。しかし、按司の数は非常に減少して

いた。按司は首里に居住し、かつての領土は按司掟と呼ぶ代官に支配させ、しだいに俸禄によって徒食する文官的貴族と化していったのである。

以上で、琉球における按司の発生とその動向の大体について、うかがい知ることができよう。

次に、奄美諸島における按司の割拠についてみることにしよう。「奄美大島史」によると、

「大島の諸処に按司屋敷あり、あるいは村近き高丘の嶺を平かにし、あるいは山間人の通い難き険峻の地を選びて地引をなし、且つ環らすに往々壕を以てせり。伝え云ふ、大昔戦斗のありし跡なりと（奄美史談による）徳之島小史に曰く、往昔当島は所々に酋長の如きものありて其部落土人を支配せり、之を按司といい、按司の居所を『グスク』と伝えたり。今なお所々部落の後方なる丘山に『何々グスク』と名付けたる所あるは、すなわち『按司屋敷』の遺跡なりといい伝ふ。酋長の城塞としては規模小なりといえども、三方断崖をめぐらし、前方は漂びようたる海岸に臨み、如何にも形勝の地を占めしものというべし（中略）これらの

ことより推考すれば、当時の按司が土人にあらずして、琉球より渡来せし者なる事を知るべし。かくの如くして按司は当島に勢力を有し、土人を率ゐ常に琉球と連絡を結び終にその制を受けたり」と述べている。

また、「大奄美史」の「按司と按司屋敷」の項では、「酋長の中には自ら称して按司といった者もある。按司は本来琉球の貴族で、諸侯を意味する語である。大島の酋長の中には、三山分争時代に琉球本島で志を得なかつた貴族や勢力の弱かつた按司が、宮古・八重山におけると同じく、大島にも渡つてきて、酋長（按司）となつた者のあることが注意される。大島と琉球との交通は、大島が琉球に服属する遠い以前から行われたらしく、ただに按司が渡来したばかりでなく、普通の琉球人の渡来や移住もあつて、その交渉はすこぶる密接であり、すでに服属以前に琉球本島から侵入した勢力は相当大きかつたと思はれる。（中略）大島には所々に按司の居城であつた按司屋敷なるものがあつて、あるいは村近き丘陵の頂を平坦にし、あるいは山間嶮阻の地を選んで地引をなし、めぐらすに往々壕を以てし、

その当時としては難攻不落の要害を誇っていたが、口碑は伝えてこれが往古戦斗のあった跡だといっている。今は荒廢に帰して畑地になり、僅かにその痕跡を止むるばかりである。」

と述べられている。  
これで、奄美諸島における按司の全ぼうをうかがい知ることができたであろう。

次に、沖永良部に按司屋敷跡という所があるということについては、これまで耳にしたことがないが、「大奄美史」によると、

「舜天の孫義本王は在位中、國內饑饉に襲はれ、疫癘流行して人民の半数を失ったので、その罪を自己の不徳に帰し、位を攝政英祖にゆずり隠退したまま行先不明になったということである。

然るに沖永良部島の伝説や、大島の芝家および清原家の系図など総合して考えると、義本王は隠退後一たん國頭村に姿を消し、そこから西紀一二六〇年一族を率いて曾祖父為朝が一時居住したという、沖永良部島の畦布を慕い畦布の湾川浜に上陸し、按司として島に

君臨した。畦布は按司府の転である。」  
と述べられている。

畦布の湾川浜の近くに湾川山があり、その山麓に湧泉「湾川」がある。部落民の飲料水に供されていたので、水源涵養林として保安林になっていたからであろうか、部落民は霊山としてあがめ、ここに立ち入ることはもちろん、指さすことさえはばかれるほどで、昔から斧鉞を入れたことのない聖地とされている。四季を通じ、常時うっ蒼と樹木が茂り、三方断崖に囲まれ、北方は断崖を隔てて海岸を望み、いかにも要害の地である。この湾川山の中央部やや西寄りに「大和城」跡と言われる所がある。

かつては城塞があったといわれるが、明治末年ごろ道路改修のために城塞の石畳を崩し大部分が持ち去られたよしで、現在は当時人力では運べなかつた礎石の一部分が散乱しているだけである。

伝え聞くところによると、平家の落武者がここ湾川泊に上陸し、湾川山に居城を定めたのでそこを「大和城」と言う、との伝説もある。また、ここに往昔「按司府」があつたとし、按司時代貢物の集荷倉庫であつた「貢物

倉」敷跡や「御百殿敷」跡、それに「この浜を「按司浜」と言う理由など」と関連づけた伝承があり、土地の人々はそれを信じている。

しかし、「畦布は按司府の転である」とすることについては、按司の本場ともいふべき沖繩では按司の本拠を「グスク」と言つて「按司府」とは言わないし、表記の「按司府」という字面から按司は分かつても、「府」には役所の意があるが琉球の古文獻にもまた地名についても府の字を用いた役所名がないことから「按司府」説には否定的で疑問をいだく向きがおられるので、「畦布は按司府の転である」と解するのは早合点であろう。

また、按司の居所を「グスク」と言うことについてであるが、沖永良部で「グスク」と言えばとりもなおさず内城のことである。その「グスク」についてはいまさらくどくど言うこともあるまいが、ここが真松千代世之主以来のことであることは「世之主由緒書」にも述べられており、それを裏書きするかのよう、「おもろさうし」卷十三の一一四に

本文

一 ゑらふたつ あすた 一 永良部発つ 長老たち

訳文

大きくすく げらへて 大きくすく 造つて  
げらへ やり 造つて やりなさい  
おもひくわの おため 思ひ子の おため  
はなれたつ あすた 又 離れ島発つ 長老たち  
大きくすく 大きくすく

とある。通訳すると「離島の沖永良部へ出発する方々、大きな城を造つてやりなさい。かわいいお子のために」となるが、これを通してみても、その辺の消息を伝えるものであることが分かる。

沖永良部の古謡に「ゲラル孫人が積み上げたるグスク永良部三十祝女の遊び所」というのがあることに照らしても、このグスクが按司にちなんだものでなく、「世之主」の城以降のものであることが分かる。

「沖永良部島史」は、「城とは御宿の意味から起つた琉球独特の文字であるをみると、按司は琉球からきたものかと思はる。沖永良部の上城、下城、大城、内城、玉城等はすなわち按司の居城であつた」と述べているが、字面は城を当てても訓はすべてシロであり、内城をグスクという以外は、ニシミ(上城・下城)、フースク(大城)、イニヤト(玉城)と呼ぶ地名から推しても、按司

の居城跡と解するのは早計であらう。

何々「グスク」に当たるものに、前記の畦布の湾川山の  
の大和城のほか、上平川の「ヒヨウグスク」がある。  
かつては城塞らしい石櫓があったが、耕地整理で取り  
壊されて今では跡形もないが、「ヒヨウグスク按司」の  
居城跡という伝承はあるという。

いずれにしろ、琉球統治下に行政官を派遣して奄美の  
島々を統治せしめたことについては理解できる。とりわ  
け沖永良部島の場合は、按司の統治せし痕跡なく大島諸  
島が入貢せし翌年すなわち文永四年(一二六七)から「曾  
長を遣わし」とある。曾長とは按司ではなく大屋子の  
ことではなかるうかと思われる。

### 三 源平伝説

#### (一) 為朝来島伝説

史書に記された資料によると、鎮西八郎為朝は保元元  
年(一一五六)の保元の乱で、味方していた崇徳上皇方

れが喜界島の志戸桶の狩俣の水として現在も人々の飲料  
に使われている泉である、ということである。

さらに伝説は続き、為朝は民家の方に訪ねて行った。  
そこに一人の美しい娘が機を織っていたが、彼を見るな  
り「貴男はヤマトの御曹子八郎殿だろう」と言う。為朝  
がびっくりすると、昨夜夢を見たというのである。それ  
から二人は夫婦の契りを結び一子を得た。

為朝は次いで大島に渡り、加計呂麻でも土地の女と子  
を設けた。その子は実久三次郎と呼ばれる人で、怪力の  
豪雄になる。さらに各地に足跡を残し徳之島に渡り、大  
田布岳頂上から南方を望見した時に座って見たという座  
石が今も残されているという。

次いで沖永良部に渡り、畦布の小字城前に為朝居城の  
跡と伝えられる所があり、子弟に武術を伝授したという  
「手使」に、日穴・洞穴御温習侯などと呼ばれる所が  
ある。為朝はここでも島の娘「思志那」(お品か)をめとっ  
て、一子を挙げた。さらに沖繩に渡ったことになっている。

沖繩での為朝伝説は周知のとおりであるが、運天港に  
上陸したということも、舜天が為朝の子であるというこ  
とも、いまのところ伝説または一学説の域を出ないもの

が敗北したため伊豆の大島に流され、治承元年(一一七  
七)追つ手を受けて自決したことになっている。したがっ  
て為朝は、伊豆の大島に二十二年間居たことになる。

当時、日本国内でも豪勇無比といわれていた彼が為朝が、  
この小さな伊豆の大島に二十二年間という長い期間、安  
閑として日が過こせるはずはない。初めのうちは退屈し  
のぎに海に船を出して遊んだことであらう。そのうち、  
しだいに沖の方遠くまで出て漁などしたに違いない。

学者の説では、彼が為朝は永万元年(一一六五) 従者数  
名を従えて舟に乗り、東風を利用して西に航したとある。  
風の吹き具合によつては、伊豆の大島から喜界島まで  
は一日で行けるという。彼もおそらくそのような風を利  
用したのであらう。

伝説では、彼は風に舟を任せて走らせるうち、かなた  
に島影らしいものが見えた。彼は雲か島か判じかねたの  
で、得意の弓に矢を番え、満身の力をこめて引きしぼり、  
ヒューツと矢を放した。手こたえあり、「島だ」と叫んだ。  
こぎ寄せて上陸した。矢の当たったと思われる方向に進み  
行き、探し求めた。ようやく見つけた矢は岩に刺さって  
いた。引き抜いたところ、矢跡から水が噴き出した。こ

のようである。

「大奄美史」で、舜天の孫義本王は前述のように、「沖  
永良部畦布の湾川浜に上陸し、按司として島に君臨した。  
また、間もなく次男継好は奄美大島に渡り、阿麻弥大主  
となつて西間切篠川に居住した。これが芝家の祖先であ  
る」と述べられている。

これとても、歴史的に科学的に立証することは、おそ  
らくできないであらう。彼が為朝は、伊豆の大島に流され  
た時が十七歳の青年である。十三歳で九州に流され、十  
六歳で九州を平定したほどの豪勇の彼が、二十二年間も  
男盛りの血氣時代を小島でむなしく過こしたとは考えら  
れない。彼の琉球渡来、そしてその間奄美大島に一年近  
く居たことや、沖永良部に一年余り居たということの伝  
説は、事実あつたものと信ずるに足るものがあると思わ  
れる。

#### (二) 平家残党南下伝説

平家落人伝説は全国的に各地にあり、北は対馬から南  
は与那国島に至るまで、六十箇所に及び、そのいずれ  
もその地方では信じられていることであるけれども、歴

史には採り上げられていない。

宮崎県の椎葉村とか熊本県の五箇荘など、その代表的なものである。

歴史の示すところによると、文治元年（一一八五）壇ノ浦の戦いで敗れた平家は全滅し、安徳幼帝は二位の尼に抱かれて海に没したことになる。しかし考えてみると、平家は海の強者を味方しているのであるから、海にはあまり慣れない源氏の兵にそうやすやすと全滅させられるはずはない。あまたの軍船の中には、主力の教経や知盛の戦死を見て戦っても無駄なるを悟り、再起を期して逃亡を企てた者もいたであろうことは当然のことである。そこに、各地の平家落人伝説の種が残るわけである。

ここで硫黄島や奄美大島の伝説に移ることになる。

安徳帝を擁した一行は、後に奄美大島にまで来た資盛・行盛・有盛といった平家の御曹子たちで、彼らは壇ノ浦を逃れて南下し、豊後・日向を経て大隅にたどり着き、さらに南下して硫黄島に身を隠した。

そこに安徳幼帝の行在所を設け、神器を奉祭した。しかしまだ油断はならない。再興を計る安全な地を求めた。仮に三十年とみても一二二〇年くらいまでである。そのころには、すでに為朝の子といわれる舜天が琉球王になった後であり、一二六四年には琉球に入貢しているから、それ以前に平家の残党としては身に危険があったわけである。

それで平家の流れであることを隠すことに努め、次の代になるともはや自分が平家の血を引く者であることを知らない者もいることになったことが考えられる。しかし主立った者は、ひそかに我が子にそれを伝え継いだであろう。それが若干の物的遺跡につながって語りつがれ、今日の平家伝説が残ったというべきであろう。

大島本島の次に八重山島、与那国島にその遺跡を止めているが、沖永良部島にはなんらの痕跡も止めていない。これは、その当時沖永良部には為朝の子孫が勢いを得ていたから、平氏はここを避けたのであろうと、幣原博士は「南島沿革史」で述べている。

沖永良部では、畦布の湾川山にあったといわれる大和城に住んでいた人々は、平家の残党の一味郎党ではなかったらうかとの伝承があったが、歴史的に科学的に立証できるものはない

いたのである。安徳幼帝を守る一部を残して、資盛・行盛・有盛という三人の公達を擁して南下した。幣原博士の「南島沿革史」によると、竹島・硫黄島・黒島・口之永良部・口之島・中之島・臥蛇島・平島・宝島を経て、まず喜界島に上陸した。三年間喜界島に滞在し、様子を探った。

大島には恐れるほどの武力がないことが分かったので、有盛は東表から北表へ、行盛は南表へ、資盛は西表へと船を乗りつけ、資盛は諸鈍に、行盛は戸口に、有盛は浦上に、それぞれ居城を構えた。その間若干の抵抗があったことはいうまでもない。

このようにして大島の各要衝の地に分散駐在して、都へ帰還の機を待っていたことであろう。

その後源氏の子孫といわれる島津氏の領することになった奄美では、平家の残党であることを隠す必要があったであろうから、そのための作り話もあるようである。

壇ノ浦で平家が敗れたのが文治元年（一一八五）、それから奄美までたどり着くの五年かかったとみても一九〇年、彼らが奄美で何年暮らしたか明らかでないが、

また沖永良部の人々の中に、かの世之主の家臣の一人後蘭孫人は平家の落人の一人だと言う人がいるが、壇ノ浦で平家が滅亡したのは文治元年（一一八五）で、世之主が自決したのは応永二十三年（一四一六）であることから、どう推考してもとうてい承服できない。

それにしても、平家の落人説が沖永良部にあることは、何に原因するのであろうか。

#### ○参考文献 「大奄美史」ほか